



newsletter

Nexus-HHC

Japan Home Health Care Alliance

Issue 21  
2026.APR

〈Nexus (ネクサス) : 集団、結合体、つながりや結びつき〉 多職種で在宅ケアを支える日本在宅ケアアライアンスを表すのにふさわしい言葉として、会報名にいたしました。



To JHHCA  
Message

## 赤ひげ⇒「なんちゃって在宅医療」を超えて



福祉と医療・現場と政策をつなぐ  
志の縁結び係 & 小間使い

大熊 由紀子

【PROFILE】

Okuma Yukiko  
朝日新聞定年後、大阪大学大学院教授を経て、国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム分野教授。著書に、『物語・介護保険』（岩波書店）、『恋するようにボランティアを』『日本を変えようとした79の社説+α』『精神病院・認知症の〈闇〉に9人のジャーナリストが挑む』（ぶどう社）など。

実地医家のための会が誕生したのは1963年。「病む人を中心に、互いの胸を借りあいながら、知的興奮集団として勉強し、行動する」。その心意気に魅せられました。1978年には、日本プライマリ・ケア学会が「弟分」として誕生。「現代版赤ひげ時代の到来」と感激しました。ところが…

1984年に朝日新聞の論説委員室に移った私は「厚生行政の最大の課題は、寝たきり老人が西暦2000年に100万人を超えること」と説明され、老人病院を訪ねて愕然としました。ウツロな表情で横たわっている人々。そして、介護に疲れての心中や殺人。

日本より先に高齢化が進んだヨーロッパの5つの国を訪ねて、再び愕然としました。「寝たきり老人」という概念や役所用語が、どの国にもなかったのです。その人たちは、独り暮らしでもお洒落をして自宅で暮らし外出も楽しんでいました。その12の秘密を、1990年、『寝たきり老人』のいる国いない国』（ぶどう社）にまとめました。

32刷、12万人が読んでくださいました。

「ホームヘルパーが朝昼晩現れる」「訪問看護婦は名探偵」に加え、「家庭医という名の専門医」も「秘密」のひとつでした。それは、心意気ではなく、「システム」でした。家庭医のもとでの修業、病院で各科を回り、さらに夜の往診の修業。高い評価を受け、デンマークに住む人はすべて「かかりつけ医」を登録します。相性が悪かったり、信頼できなかったら、年に1回の登録のとき変更できます。多くの患者から信頼される医師ほど報われる仕組みです。

「秘密」は、2000年にスタートした介護保険のメニューになりました。認知症で悪性リンパ腫、要介護4の母は、ヘルパーさんや補助器具、訪問ナースのおかげで、2015年、自宅で天寿をまっとうしました。95歳でした。

2006年、在宅療養支援診療所が創設されました。しかし、20年経過する中で良心的な在宅医療を駆逐するように、24時間体制をうたいながら、夜はアルバイト医に任せきり。死期が近づくと評判の芳しくない病院に送り込む、という「なんちゃって在宅医療」が横行しています。10年前の母の看取りのときと違い、ヘルパー志願も減る一方です。

けれど、デンマークを超えるかもしれない動きも生まれつつあります。例えば、医師は常勤で、院長自ら夜の往診。医師、看護師、栄養士たちが、毎朝8時に集まって、患者さんのこまやかな情報を伝えあう診療所や、在宅診療報酬を予算不足の訪問介護に回しているところも出現したり…そして「愚直な在宅医療保存会」も立ち上がりました。

「治し、支える」から、新たなミッションへの取り組みが始まろうとしています。

## VOICE of Chairman

長く生きてほしい

(一社)日本在宅ケアアライアンス理事長

新田 國夫

診療・介護報酬改定は近未来の地域医療の姿を示す羅針盤だ。今回、一馬力診療所の在宅医療に対しては、厳しい評価となっていることに、疑問を感じる。東京都の24時間体制事業では、夜間出勤がなかったところが大部分だったが、日中に対応をしておけば、夜間の出勤はない。一馬力でも十分に対応できる。「人は何かのために生きるのではない。誰かのために生きるのだ」。『大河の一滴』(五木寛之)の一節であるが、医者が病者のために生きるのはあたりまえだ。制度に翻弄されることなく、大切な患者さんたちを前に、わたしも長生きして末長い診療の継続を目指したいと思う。

